

辺塞詩としての蝦夷漢詩 幕末道南にゆかりの詩人を中心に

日本海



函館工業高等専門学校 泊 功

太平洋

道南

明治2年までは「蝦夷地」

ほ っ か い ど う
北海道

本日の発表について

- 一 蝦夷漢詩・北方辺塞詩の定義
- 二 辺塞詩の範疇
- 三 日本における辺塞詩
- 四 江戸期蝦夷地における「辺塞」状況
- 五 蝦夷漢詩Ⅱ北方辺塞詩を詠んだ人々
- 六 北方辺塞詩とは何か。
- 七 先駆者松前廣長の辺塞詩
- 八 辺塞詩としての蝦夷漢詩
- 九 津軽藩士唐牛大六の北方辺塞詩

一定義

北海道特殊論（文化的僻遠・土地の大きさ・冬の気象条件の厳しさ・少数民族の存在・ヒグマ・**国境未画定地帯の存在**など）に基づく分類



蝦夷漢詩：蝦夷地に来て、あるいは来ずともイメージで蝦夷地の風物・人情を詠んだ漢詩。

北方辺塞詩：**蝦夷漢詩のサブジャンルとして確立したい**。辺塞詩的意識あるいは辺境意識によって蝦夷地の自然・風物・人情を詠んだ漢詩。

二 辺塞詩の範疇（諸説あるが……）

「辺塞」

辺境＝国境付近もしくは国境未画定地帯（フロンティア）に、異民族の侵入を警戒、防御するために作られた砦。

「辺塞詩」とされてきたもの

狭義には辺境の風物、戦場にある兵士の様子や心情を描いた盛唐を中心とする詩だが、**広義**には時代を限らず、異民族との戦いに備える兵士の出征・従軍・帰還や、あるいは彼らを待つ女性や家族の心情、また友人などを辺境に送り出す際の送別を詠んだ詩。

詩経→楽府題の詩→盛唐

伝統的な詩の題材

（例）『文苑英華』 「辺塞」部

五十四首中「送」は十一首（20％）で、有名な王維「送元二使安西」を含む。

リアル派辺塞詩人 王維 岑参 高適 李益（中唐）

イメージ派辺塞詩人 王昌齡 王翰 王之涣

「戦争行為への関心が希薄であるが、その一方で、辺境の風土については旺盛な好奇心を示している」（松原二〇〇五、37頁）



敦煌郊外にある陽関（発表者撮影）は典型的な「辺塞」のイメージ
「西のかた陽関を出づれば故人無からん」（王維）

三 日本における辺塞詩（江戸期）

古くは『懐風藻』所収の藤原宇合「奉西海道節度使之作」宇合は「持節大將軍」として蝦夷討伐に参加。後、「西海道節度使」を任ずる。結句「幾度か辺兵に倦む」は一兵士とは言えない宇合の実感とは違うにせよ、**リアル派辺塞詩**。

江戸期―盛唐詩の模倣

木門、徂徠門下

「そもそも近世日本で辺塞詩を作り始めたのは徂徠門ではなく、木下順庵門下、いわゆる木門の面々であった」（山本二〇一七、37頁）ただし、現実と相互らない**なんちゃって辺塞詩**

（文学的虚構）

従軍行

室鳩巢

（一六五八―一七三四）

万幕平沙上 轅門落日曛
龍城胡騎出 魚海漢軍分
鳴鼓連遼水 高旗卷隴雲
何時清朔漠 歸去報明君

塞下曲

蠣崎松濤

（一八一八―明治前？）

十万征人涉不毛
胡烽朔雪映弓刀
長安城裏遊春子
不似征虜汗馬勞

※蠣崎松濤

もとは松前家の有力家臣下国家の下国季鄰の二男弥左衛門可賀であり、波響の孫「園」と結婚して蠣崎別家を興した。藩校徽典館で山田三川に学び『松濤詩草』（三〇三首）を残す。所載の詩から**ユウフツ勤番、イシカリ勤番**の経験があったことがわかる。

※詩の引用に際しては、通行字体を用いる。

従軍行

室鳩巢

万幕 平沙の上

轅門 落日 曛々る

龍城 胡騎出でて

魚海 漢軍分かる

鳴鼓 遼水に連なり

高旗 隴雲を巻く

何れの時か朔漠を清め

帰り去つて明君に報いん

※轅門：漢軍の陣営

※龍城：匈奴の根拠地

※魚海：地名。現在の内モンゴル阿拉善右旗付近

※隴雲：隴山は陝西省から甘肅省に連なる連山で、匈奴が中原に侵入するのを防備する守備兵が置かれた。そこにかかる雲

塞下曲

蠣崎松濤

十万の征人 不毛に渉る

胡烽 朔雪 弓刀に映ず

長安城裏 遊春の子

征虜 汗馬の勞に似ず

汗馬勞：戦功

四 江戸期蝦夷地における北方「辺塞」(辺境)状況

- ・十八世紀初頭 ロシアの東進(一七一一には占守島へ)
- ・天明五年(一七八五) 幕府蝦夷地調査。最上徳内
- ・寛政元年(一七八九) **クナシリ・メナシのアイヌ蜂起①詩**
(松前藩は蝦夷各地にアイヌとの交易所「商場」を設置して直轄したものの、その後は商人に任せて運上金を徴集する場所請負制に。クナシリアイヌはすでにロシアとも交易)
- ・寛政四年(一七九二) **ラクスマンが大黒屋光太夫を連れて根室へ来航 弘前・南部藩兵が幕府宣諭使警護のため松前へ出兵⑦詩**

これ以降幕府は東北諸藩(弘前・南部・秋田(久保田)・庄内・仙台・会津)に対し、蝦夷地(北蝦夷≡樺太含む)に**陣屋(近世日本版辺塞)**を設けて、主としてロシアに対する警備を命じた。

- ・寛政十年(一七九八) 幕府蝦夷地調査。最上徳内・近藤重蔵が択捉島に「**大日本恵登呂府**」の標柱を建てる。⑥詩
- ・寛政十一年(一七九九) 文政四年(一八二二) 幕府が蝦夷地を一回目の上地 蝦夷地奉行 ↓ 函館奉行 ↓ 松前奉行
- ・文化元年(一八〇四) レザノフが長崎来航(幕府拒絶)
- ・文化三年(一八〇六) 四年 **文化の露寇**。レザノフの意を受けたロシア軍が樺太・択捉で商場・陣屋を襲撃
- ・文化四年(一八〇七) 若年寄堀田正敦・大目付中川飛騨守忠英、目付遠山金四郎景晋の蝦夷巡検
- ・文化六年(一八〇九) 七年 間宮林蔵樺太探検。黒竜江下流部のデレンにある清朝の出先機関満洲仮府へ到る。
- ・文化八年(一八一―) **ゴローニン事件**
- ・文化十年(一八一三) 高田屋嘉兵衛の尽力で事件解決。 **日露関係は一時の平穏を見る。**
- ・弘化二年(一八四五) 松浦武四郎による三度にわたる蝦夷地探検
- ・安政元年(一八五四) 明治元年(一八六八) 二回目の上地目付堀利熙(後に箱館奉行)が、蝦夷地掛として村垣範正(後に箱館奉行)らとともに、蝦夷巡検。随行は横井豊山(儒者)鈴木茶溪(幕吏)他

- ・明治八年(一八七五) **樺太千島交換条約(辺境の解消)**

五 北方辺塞詩（仮称）を詠んだ（可能性のある）人々

前スライドで紹介した**蝦夷地探検家**や、**蝦夷地調査**にあたった**幕吏**、また**函館奉行**や**それに仕えた幕吏**に加え、**蝦夷地を訪れた武士**を中心とする**知識階級**など。

（内地出身者）

栗本鋤雲 函館奉行・外国奉行、のちジャーナリスト

『唐太小詩』

武田斐三郎 五稜郭の設計者、洋式兵術指南

『竹塘先生詩鈔』

榎本武揚、大鳥圭介など幕末の志士『北鳴詩史』

ただし、これらは一応活字化されている。

（蝦夷地出身者）

松前藩関係者及びその周辺の知識人

松前廣長、蠣崎波響とその係累（前出蠣崎松濤）

函館中央図書館蔵「蠣崎文書」「松前家文書」

（東北諸藩の蝦夷勤番兵士たち）

（調査先）

弘前市立図書館（令和元年）、岩手県立図書館（令和二年）、

秋田県立図書館・公文書館（令和二年）、会津若松市立図書館・福島県立図書館（令和三年）、鶴岡市立図書館・藩校致

道博物館（令和四年）、宮城県立図書館・仙台市民図書館・

山形県立図書館（令和五年）、別海町郷土資料館（令和五

年）

（松前藩）

松前廣長 『覆甕草』、蠣崎伴茂（松濤） 『松濤詩草』

函館中央図書館蔵の手稿・線装本

藩校教授・用人山田三川 『三川詩集』（高崎市立図書館）

（会津藩）

秋月悌次郎（韋軒）、南摩綱紀（羽峯）

会津藩の守備領地である中標津・別海で代官兼守備隊長

それぞれ『韋軒遺稿』『環碧楼遺稿』が活字化

（津軽「弘前」藩）※成果はこの一冊のみ

唐牛大六（満春・伯陽） 『松前紀行』

弘前市立図書館蔵の手稿本・線装本

武士Ⅱ漢学の素養の持ち主、だからと言ってみんな詩が詠めるわけではない。

六 北方辺塞詩とは何か。

A 蝦夷地の特異な地理・自然・気象

B 異民族Ⅱアイヌの風俗

C 内地との異常な隔たり、ロシアを仮想敵とする辺境性・植民地性

D 蝦夷地へ行く人への送別詩

D 以外は実際に蝦夷地を訪れて詠んだものとする。



カムイミンタラ 大雪連峰旭岳の冬

七 松前廣長（『覆甕草』） の先駆的北方辺塞詩

① 己酉之夏兵士征東夷

高 旗 飄 北 海
金 鼓 聞 東 夷
不 用 干 戈 術
秋 来 必 斂 師

己酉の夏 兵士 東夷を征す

高旗 北海に飄（ひるがえ）り
金鼓 東夷に聞こゆ
干戈の術を用ゐずして
秋来 必ず師を斂（をさ）めよ

※己酉：寛政元年（一七八九）。五月クナシリ・ネモロ地方のアイヌが蜂起し、松前藩は銃や大砲を携えて出兵。戦にはならず、他のアイヌの協力で首謀者を捕らえ処分して終結。クナシリ・メナシの戦い
※金鼓：中国より渡来した軍隊指示用の金属楽器（鐘や鉦）と皮製太鼓の類

松前廣長（一七六四〜一八二六）松前藩家老で『松前秘府』を編纂するなど、藩随一の碩学。画家で家老蠣崎波響の文学・学問の師。

八 辺塞詩としての蝦夷漢詩

② A 「特異な地理・自然・気象」
松前風土 山田三川

節 過 三 春 春 始 回
牡丹 開 雜 早 梅 開
東 風 不 開 肯 拘 花 曆
二 十 四 番 一 日 来



牡丹

早咲きの紅梅



節 三春を過ぎて春始めて回る
 牡丹 鬧雑して 早梅開く
 東風 肯へて花曆に拘（こだは）らず
 二十四番 一日に來たる

※山田三川（一八〇四～一八六二）は伊勢の人だが、幕末期松前藩の藩儒（藩校徽典館教授）・用人（天保十年「一八三九」～嘉永元年「一八四八」）を務めた人物。本詩は高崎市立図書館蔵『三川詩集』所載。松前藩での職を辞した後は安中藩の藩儒。新島襄を教えた。

※三春：孟春・仲春・季春（陰暦一月～三月）

※二十四番：二十四番花信風のこと。春の二十四節気の中で、小寒から穀雨までの八つの節気には代表的な三つの花（3×8＝24）が配されているが、それぞれの花の開花を知らせる風。ちなみに小寒の花は梅・椿・水仙。牡丹は春の最後「穀雨」に配せられる。

ちなみに北海道では辛夷、モクレン、梅、桜は、ほぼ同時に咲きます。

A③丙寅六月中旬戸切地営中偶作
(慶応二年 一八六六)

蠣崎松濤(伴茂)

夏猶不夏有寒威
風氣常多暑氣微
且道営中最新涼
至今六月中疊毛衣

戸切地陣屋大手門
(北斗市)



陣屋跡は桜の名所

※且道：試みに言う

③丙寅六月中旬戸切地宮中偶作

蠣崎松濤（伴茂）

夏 猶ほ夏ならずして寒威有り
風気 常に多く 暑気 微かなり
且（しばら）く道（い）ふ 宮中 最も冷涼
今に至る 六月 毛衣を畳（かさ）ぬ

※丙寅：慶応二年（一八六六）

※蠣崎松濤：（文政元年「一八一八」→明治初）：親戚筋である下国季隣（すえちか）の子で、波響の孫園と結婚して蠣崎別家を興す。学問・文学好きだったようで、中央図書館には「蠣崎文書」のひとつとして、個人詩集である『松濤詩草』をはじめ多くの文書が残される。

※戸切地陣屋：松前藩が北方警備のために、安政二年（一八五五）北斗市野崎に構築した西洋式の出城（四稜郭）。戊辰戦争のときに旧幕府軍との戦いを前に自陣に火を放ち撤退。伴茂は詩を詠んだ慶応二年に「備頭」（守備隊長）をしていたが、同年十月には寺社町奉行に転出した。

※且道：試みに言う。確定的でないことを提示する



『蝦夷島奇観』（寛政12年）所載の「熊送り」絵

一 場 歌 哭 動 秋 穹
 木 幣 麩 麩 岸 樹 中
 日 暮 老 夷 来 報 道
 西 隣 明 旦 祭 雛 熊

④ B 「アイヌⅡ異文化との関わり」
 唐太小詩（第一首） 栗本鋤雲

④

栗本鋤雲

一場の歌哭 秋穹を動（どよも）す

木幣 毳毳たり 岸樹の中

日暮 老夷来りて報道す

西隣 明旦 雛熊（すうゆう）を祭ると

※ 栗本鋤雲（一八二二〜一八九七）は文久二年（一八六二）：箱館奉行所に奉職し、幕命により南千島・樺太を探検した。維新後は詩人・ジャーナリスト。

※ 木幣：祭祀に使う幣、すなわちイナウ。

※ 毳毳：細長いものが垂れ下がるさま。

※ 老夷：アイヌの老人。エカシ。

※ 祭雛熊：熊送り、イヨマンテ。

⑤B 題夷人像

早坂文嶺

断 髮 左 衽 馱 舌 声
渾 家 鮮 食 海 縦 横
功 名 富 貴 総 無 意
羨 爾 獵 漁 過 一 生

⑤ 夷人像に題す

断髮 左衽 馱舌の声
渾家 鮮食して海に縦横す
功名富貴 総て意無く
羨むのみ 獵漁して一生を過ぐすを

※早坂文嶺（一七九七～一八六七）アイヌ
絵を得意とする画家で、山形出身だが弘化
年間に松前に来て活躍。

※渾家：一族すべて

⑥ 「辺境性・植民地性」

松前城下作

長尾秋水

北	從	波	海
辰	此	際	城
直	五	連	寒
下	千	檣	柝
建	三	影	月
銅	百	動	生
標	里	揺	潮



松前城の入り口付近にある「松前城下作」詩碑

⑥松前城下の作

海城の寒柝（かんとく） 月 潮よ

り生じ

波際の連櫓 影 動揺す

此より五千三百里

北辰直下 銅標を建てん

※寒柝：「柝」は夜回りの時に刻を知らせる拍子木。ここでは寒さを警告する。

※長尾秋水（一七七九〜一八六三）：名を景翰と言ひ、越後村上の人。江戸や水戸で学び、文政二年（一八一九）に松前に渡った。本詩は「松前遊詩 二十首」の中の一詩。現在、松前城天守閣の脇には同詩の碑が建っている（前頁）。秋水はこの一絶によって全国に勤王詩人として知られるようになった。秋水の渡海に先立つ約二〇年前、最上徳内は寛政十年（一七九八）、択捉島に日本の領有を示す「大日本恵登呂府」の標柱を建てている。また、後漢の馬援が交趾を占領したとき、漢の領土ということを示すために銅標を建てたという。



松前から見た岩木山

可秀嶽家三一片故乘
 堪色入懸峯片国晴
 懷依眼夢氷火名極
 土然中裏雪雲山目
 客千幾何渡生隔望
 愁里日人江暑海鄉
 催影回到來送開台

⑦ AC 松前客舎望巖城山

唐牛大六(満春)

晴に乗じて目を極む望郷台
故国の名山 海を隔てて開く
一片の火雲 暑を生じて送り
三峯の冰雪 江を渡りて来たる
家 夢裏に懸るも何人か到らん
嶽 眼中に入るも幾日か回らん
秀色 依然として千里の影
堪ふべけんや 土を懐ひて客愁を催すに

※**松前客舎**：蜀中九日：寛政四年（一七九二）ラクスマンが根室に来航。翌年、幕府は彼らを函館へ回航させ、松前で会談。弘前・南部藩兵が幕府施設警護のために渡った。

※**唐牛大六**：一七五九〜一八〇三。警備隊に同行した弘前藩の筆談儒員。昌平黌で学ぶ。

※**望郷台**：故郷を望む高台。王勃「蜀中九日」の「九月九日望郷台」や、杜甫「遣愁」（愁ひを遣る）の「地隔望郷台」（地は隔つ望郷台）のように、蜀（四川省）で詠まれた詩に多用され、歌枕としては四川省成都付近にあったものだが、ここでは松前から津軽地方を望める高台のこと。

※**火雲**：夏雲。岑參「出関経華嶽寺、訪法華雲公寺」（関を出でて華嶽寺を経、法華雲公寺を訪ぬ）詩の「五月山雨熱 三峯火雲蒸」（五月 山雨熱く 三峯火雲蒸す）句を踏まえるか。大六が松前にいた時期は四月から七月下旬（旧暦）と、夏の時期と重なる。

※**三峯**：先の岑參の詩では、五岳の一つ華山の蓮華峰・毛女峰・松檜峰という三つのピークを指すが、ここでは岩木山の三つのピークを指す。岩木山は独立峰ではあるが、山頂部は主峰・鳥海山・餓鬼山の三つのピークに分かれる。

※**懐土**：故郷を思うこと。『論語』（里仁）「君子懐徳、小人懐土」（君子は徳を懐ひ、小人は土を懐ふ）

参考)松前広長『復甕草』所載詩

癸丑仲夏都加留医人廣瀬生並士人唐牛生見訪
予之別莊枕流館即賦謝

聯 翩 仙 客 扨 雲 来
難 勸 山 中 濁 酒 杯
只 有 林 泉 無 雅 興
請 留 君 待 月 華 開

癸丑仲夏、都加留医人廣瀬生並びに士人唐牛生、予の別莊枕流館を訪ねらる。即ち賦して謝す

聯翩として仙客雲を扨ひて来る
勸め難し 山中 濁酒の杯
只だ林泉のみ有りて雅興無し
留むるを請ふ 君 月華の開くを待て

※聯翩…つらなり続く。次々と

※廣瀬医生…唐牛大六ともに寛政の松前出兵に同行していた弘前藩医師廣瀬道節

⑧D 蝦夷地へ行く人への送別詩

送人従軍之蝦夷 其三 山梨稻川

腰 間 三 尺 古 青 萍
壯 爾 従 軍 赴 北 庭
万 里 揚 旌 臨 絶 域
千 帆 転 餉 渡 窮 溟
異 花 含 露 山 煙 暗
絶 島 連 雲 海 気 腥
限 界 須 標 伏 波 柱
勒 功 誰 数 孟 堅 銘

『稻川詩草』中、四首連作の三首目

人の従軍して蝦夷に之くを送る

腰間 三尺の古青萍

壮なるのみ 従軍して北庭に赴くとは

万里 旌を揚げて絶域に臨み

千帆 餉を転じて窮溟を渡る

異花 露を含んで山煙暗く

絶島 雲を連ねて海気 腥（なまぐさ）し

界を限り 須らく標つべし 伏波の柱

功を勒（きざ）むに 誰か数へん 孟堅の銘

※山梨稻川（明和八年「一七七―」）（文政九年「一八一―一八二六」）：甲斐の儒者・詩人。

※古青萍：越王勾踐が所持していた名剣。

※北庭：匈奴の支配する北方辺境地域、あるいは北庭都護府ことで、ここでは蝦夷地を指す。

※転餉：兵糧を移送すること

※伏波：漢代に置かれた水軍を率いる伏波將軍のことで、「その威は波風をも鎮めるほどだ」という意味が込められる。

※孟堅：後漢の歴史家班固の字。大將軍竇憲の匈奴征討に扈從し、竇憲が匈奴を大いに破ると、その功を称えた「封燕然山銘」を撰文し、摩崖石刻として刻ませた。

※誰数

「封大夫の播仙を破り凱歌するに献ず」
其一 岑参

漢将承恩西破戎 捷書先奏未央宮
天子預開麟閣待 祇今誰数弑師功

※詩題中の「人」とは誰か

『稻川詩集』中の別詩に「奉送**服部侯**之任松前」（服部侯の任に松前に之くを送り奉る）がある。**服部貞勝**（一七六一―一八二四）は旗本。駿府町奉行のとき「駿河大地誌」を企画し、その際の総裁として稻川を任命した。ただ貞勝が**松前奉行**に転出したためこの企画は実現しなかった。

送工藤氏二首 東蝦夷クナシリ嶋勤番
歌 尤 九郎三衛門也

海山万里 幾関河
聞説 辺城 友不多
祖席 莫辞 勸杯酒
明朝 好去 慎風波

海山 万里 幾関河
聞説 (きくなら)く 辺城 友 多からずと
祖席 辞する莫かれ 杯酒を勸むを
明朝 去るに好し 風波 慎ふ

送君話罷別離愁
行役親朋不少留
為祝首途千万里
明年無恙大刀頭

君を送り 話罷み 別離の愁ひ
行役 親朋 留むること少なからず
為に祝る 首途 千万里
明年 恙無く大刀頭

※**工藤氏**：久保泰 『松前藩家臣名簿』（二〇二一、自費出版）に載る工藤九郎左衛門ことと思われる。同書によれば、工藤九郎左衛門は嘉永六年（一八五三）に藩中書院に出仕しているが、同時期に松濤も中書院に出仕している、言わば二人は同僚であった。また安政二年（一八五五）にはエト口フ島に出張している記録も残る。本詩は天保十四年（一八四三）の詩中に載せられているので、その折にクナシリ島への出張があったものと考えられる。

※**祖席**：送別の宴会

※**大刀頭**：刀環のついた大刀。「環」は「還」と同音で「還る」に通ずるため、この語は「帰還」の隠語として使われる。前漢武帝の時代の武将李陵は匈奴に降伏していた時、漢の使者としてやってきた友人の任立迪等と面会した。任は李陵に対し、恩赦が出ていて漢に帰還できることを暗に伝えるのに刀環を何度もさすって合図したという。だが、李陵は再び辱めを受けるのを避けるために帰還しなかった。

(テキスト・参考文献)

- ・伊藤誠哉『北海詩談』(一九五四、北海詩友社)
- ・蠣崎松濤(伴茂)『松濤詩草』(函館中央図書館)
- ・河野常吉著・発行『北海百人一首』(民友社、一九〇六)
- ・唐牛大六『松前紀行』(弘前市立図書館)
- ・戸川安宅『北鳴詩史』(一八九七年四月発刊の雑誌『旧幕府』所収)
- ・尚学図書『漢文研究シリーズ9「唐代辺の塞詩」』(一九八五、尚学図書)
- ・広瀬龍一『北海道詩歌順礼』(一九五三、私家版)
- ・富士川英郎『詩集 日本漢詩』(一九八五、汲古書院)
- ・松原朗「辺塞詩の出現 ―梁陳における邊塞詩を中心に―」(二〇〇五、『中国詩文論叢』24)
- ・松前廣長『覆甕草』(函館中央図書館)
- ・山田三川『三川詩集』(高崎市立図書館)
- ・山本嘉孝「室鳩巢の辺塞詩―盛唐詩の模倣と忠臣像の造形―」(二〇一七、『語文一〇八』)

(謝辞)

本報告は、科学研究費課題「江戸後期から明治時代に亙る日本辺塞詩の研究」(基盤研究C 課題番号19K00339)の助成を受けている。ここに感謝申し上げます。